

No.3006

せめぎあいのある場としての村落

——ネパール、グルン社会における宗教的対立をめぐる人類学的研究

首都大学東京大学院 人文科学研究科

博士後期課程

吉元 菜々子

本研究は、ネパールのグルンと呼ばれる人びとを対象とした人類学的調査を通じて、グローバルに展開するグルンの民族運動において表出する宗教をめぐる対立的状況を、村落というローカルな場に注目しつつ明らかにすることを目的としたものである。

近年グルンの間ではポジューやギャブリと呼ばれる宗教職能者を中心に口承で伝えられたきた宗教実践を伝統的なグルンの宗教であると主張し、その保護を推進する立場と、チベット仏教に傾倒する立場との間の対立的な状況が顕在化している。さらにそのような対立的状況は、チベット仏教の僧院や土着の民俗宗教を象徴する寺院「コヒボ」の建設という形で都市部から村落部へと波及しつつある。本研究では、グルンの間での宗教的な対立状況を村落における寺院・僧院建設に着目して明らかにするために、文献研究および二度の現地調査を実施した。

都市部、特に多くのグルンが居住するポカラでは、チベット仏教の僧院が増加しており、チベット仏教へと傾倒するグルンの僧侶たちは村落部にまで動物供犠をやめるよう呼びかけを行っている。実際、村落部では儀礼を執り行う宗教職能者を変更し、動物供犠を排するといった影響が見られるほか、個人レベルから村落レベルまで主体は様々であるものの僧院の建設が進められている。一方、それに対抗するかのように「コヒボ」の建設も進められているが、「コヒボ」の建設を進める立場にはその内部に対立的状況も見られた。「コヒボ」が象徴する民俗宗教とは土着の宗教職能者らによる儀礼実践であり、一つの体系的宗教ではない。それゆえに、「コヒボ」の建設を進める人びとは、チベット仏教に対抗するという点では立場を同じくしているものの、保持する口頭伝承や儀礼実践、宗教的世界観は必ずしも一様ではなく、分裂や対立の潜在性を持つ。「コヒボ」や僧院の建設が進む今日のグルンの村落はそれを顕在化させる一つの場となっている。